

第十八編 ヘミングウェイは、

ケニアの海で釣りをしたのか？

アメリカの小説家アーネスト・ヘミングウェイは、「武器よさらば」(A Farewell to Arms)のあのロックハドソンとジェニファー・ジョンズの映画で、私の青春時代に記憶されている。更に、ゲイリー・クーパーとイングリッド・バーグマンの「誰がために鐘は鳴る」(For whom the bell tolls)やタイロン・パワーとエヴァ・ガードナーの「日はまた昇る」(The Sun also rises)も何度かみたような気がする。小説を読まずに映画で鑑賞するという「時代」の子だった。

「武器よさらば」は1929年、彼が29歳の時に発表され、作家としての立場を確立した作品であり、「誰がために鐘は鳴る」は1940年、40歳の時の作品で彼をアメリカの国民的文学作家にした。彼の作品の多くは短編であったが、その技法は優れ、秀作が数多くある。彼は1952年に「老人と海」(The oldman and the sea)で、ピューリッツァー賞を受賞。1954年にノーベル文学賞を受賞したが、1961年に彼の父と同じく恐らく鬱病が嵩じて猟銃自殺を遂げている。そのヘミングウェイが、アフリカに来ていたと聞いたのはナイロビで一番古いといわれているノーフォークホテルでのことだったと思う。このホテルの一室で「キリマンジャロの雪」という短編を書いていたというのだ。それ以来ヘミングウェイの事が気になっていた。そして、この3月、モンバサからマリンデイに向かう道のマリンデイ寄りの場所にワタム(Watamu)という村があり、海辺にヘミングウェイ・リゾート(Hemingways Resort)というホテルがあることを知った。本当にヘミングウェイがここに来たのだろうかと思いが胸が高鳴る思いで、リゾートホテルに足を踏み入れた。

ヘミングウェイ・リゾートは、比較的新しいホテルで、アメリカ人が好みそうな造作と雰囲気があった。まっすぐ海岸に向かって歩くと、波打ち際まで石を積んで壁をせり出させている。石壁に刻まれた段を辿って砂浜に下りると、大きな波が飛沫をあげて押し寄せている。荒海なのだ。沖に小島が二つあり、その周りに釣り糸を両脇から垂らした白いクルーザーが幾艘も、波に前後左右をもまれていた。数人の男たちが小船を操りながら浜辺に近付こうとするが容易ではない。うまく浜に突き刺すように固定できた小船には、人が群がって収穫物を陸揚げするのを助けている。見上げると波の飛沫に耐えながら鳥居の形をした黒い鉄柱に横板がつるされており、「Hemingways Resort」と白に青で大書してある。海を背にしてホテルの中央にあるドームに入ると酒場になっている。真ん中の円筒形のバーにバーテンダーが数人、客の注文にあわせて、カクテルやスコッチやバーボンを注いでいる。円筒形の天井には多くの魚たちの姿が剥製の置物のように飾られている。そして窓沿いには、席が設けられ水着の若者たちがたむろしている。ほとんどが白人だ。彼らが背にした壁に写真が掛けてある。ヘミングウェイの写真だと直感した。あるものはカジキマ

グロと思われる大物を逆さにつるして、その傍で誇らしげに胸を張っている、また猟銃を片手に友と並んでいる、クルーザーにのって若い女性とともに舵輪を握っている、酒を酌み交わしている、書籍で満載の本箱を背にして笑っている、どれもヘミングウェイの姿だが、その舞台となっている海はアフリカの海なのだろうかという疑問がのこった。黒人の姿が映っていない。

ヘミングウェイは「キー・ウエスト時代」といわれる時期を2番目の妻のポーリンと過ごしている。この土地は、大西洋に向かって突き出すフロリダ半島の先端から、細い弧を描いて伸びている一連のサンゴ礁の島（キー）の最西端にあり、東西およそ5.5キロ、南北およそ2.5キロの島に付けられた名前だ。ヘミングウェイの創作活動は、この風光明媚な島が本拠であり、彼が若い時代を過ごしたパリとは打って変わった自然との遭遇であったようだ。島の富裕な雑貨商チャールス・トンプソンのクルーザーで初めて海釣りをし、銀色の尾鰭を震わせながら洋上に飛躍する体長2メートル余りのターポン。暴れまくる巨大な魚と格闘しつつ、徐々に手練り寄せて船縁に引き上げる時の手ごたえで、彼は海釣りの醍醐味に開眼したという。このターポン (tarpon,) という大魚を辞書に引くと、「大きな銀色の鱗のある大型の海水魚、全長約2メートル、食用、大西洋の暖海域に分布」とあった。カジキマグロのように剣の形をした上顎を特徴としていないらしい。

彼は子供の頃に、行動派の大統領といわれたセオドア ルーズベルトに憧れていたようだ。テデー (ベア) と渾名されたこの大統領は、引退の後、東アフリカでサファリをやっている。1909年から1910年のことである。ヘミングウェイは、妻ポーリンの叔父で実業家のガスファイヤーの後押しで、1933年11月にフランスのマルセイユから海路アフリカに向かった。妻のポーリンと親友のチャールス・トンプソンも同行している。ナイロビに着いたのは12月10日のことだが、当時ナイロビのホテルといえば、ノーフォークホテルに泊まったのだろう。その10日後頃から、約2ヶ月に亘るサファリを展開した。途中ヘミングウェイがアミーバー赤痢にかかって1週間ほどナイロビで病床につくというアクシデントがあったが、その時にサファリの現地から小型のモス・バス機で運ばれて、キリマンジャロの威容を目のあたりにしたのが「キリマンジャロの雪」(1936年8月発表)の原点だろうし、ライオンやバッファローを狩る夜に焚き火を囲みながら聞いたガイドの経験話が「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」(1936年9月発表)の原点になっているとされる。アフリカでの生活を満喫したヘミングウェイは、1934年4月にアメリカに帰国している。つまり、アフリカに滞在したのは4-5ヶ月の間ということになる。アフリカの経験を小説にして発表した1936年頃には、スペイン市民戦争が始まり、裕福な妻ポーリンとの生活に作家としての墮落(限界)を感じ始めていたことが、この二つの作品の女主人公であるヘレンやマーゴットとの会話や雰囲気にも現れているという。

そして、ヘミングウェイの第3の妻になる女流作家マーサ・ゲルホーンとの出会いがあり、1937年には、ヘミングウェイはNANA（北米新聞連合）の記者としてスペインに赴き、スペイン市民戦争の取材報道にあたる。そこでコリアーズ誌の記者としてスペインにやってきたゲルホーンと再会し、共に歩くようになる。やがてヘミングウェイは1939年にゲルホーンと共にキューバのハバナ近郊に住み始める。同年第二次世界大戦が勃発する。1940年10月にこのスペイン市民戦争の経験から、「誰がために鐘は鳴る」を発表した。

さて、マリンデイの海といえば、インド洋だが、キー・ウエストの海は大西洋である。ヘミングウェイ リゾートで見た「あの剣のような上顎の大魚を写した豪快な写真は、何処で撮ったのだろう」という疑問が解けないままだった。そして映画「老人と海」で、銀鱗を輝かして洋上にジャンプしたのはカジキなのかターポンなのか、あの写真に写っているのは、大西洋なのかインド洋なのかという疑問がますます大きくなった。映画「老人と海」は、名優スペンサー・トレイシーが演じたが、彼の傍にいた少年はメキシコ風の服装だった気がする。ケニアが舞台ならば、少年は黒人のはずだ。そして、巨大な魚には剣があったような気がするのだ。ターポンには、剣はない。

ついに思いあまって広辞苑を紐解いてみた。「カジキマグロとは（身がマグロに似ている事から）マカジキの別名」とある。「カジキはマカジキ科とメカジキ科の海水魚の総称。マカジキ科のものは、海の表層部に、メカジキ科のものは深層にいる。太平洋・インド洋の暖海に7種が分布」とあった。「マカジキとは、マカジキ科の大形海水魚。上顎が剣状に長く伸び、背びれが大きい。全長約4メートル、体重約300キログラムにもなる。背面は黒青色、腹面は銀白色。食用。太平洋・インド洋の温帯・熱帯域に広く分布。Spearfish」とあった。つまりあの写真の剣（Spear）のように上顎が突き出ている魚がカジキマグロ（＝マカジキ）だとすれば、この魚と一緒に撮っている写真の背景の海は、インド洋ということになる。キー・ウエストは暖海だが大西洋に属している。私は小躍りした。そして、写真を見直した。逆さにつるされた大魚の鼻は長い剣か鋸の様に突き出ていたし、体長はヘミングウェイの2倍以上はあったし、大きな背びれがあり白い腹と黒い背中であった。

ヘミングウェイは、アフリカで過ごした数ヶ月の間、サファリだけでなく、海釣りもやっていたに違いない。考えてみれば、キー・ウエストで毎日のように海に親しむ生活をしてきた男が、インド洋を前にして、その血が騒がないはずがない。彼は、11月にフランスのマルセイユを出港し、東アフリカに到着したということだが、マルセイユからの船はマリンデイか、モンバサに寄港したのだろう。彼ら一行は、ナイロビに12月10日に到着したという。マルセイユからマリンデイまたはモンバサまで船で何日かかったかは定かではないが、ナイロビに到着するまでかなり日があったはずだ。赤道直下のマリンデイや

モンバサは、暑く、海は激しくうねっていたに違いない。まずは海釣りをやってみたいと思うのはむしろ当然かもしれないのだ。たとえ彼の文学作品が、アメリカに帰国後暫くたってから書かれたとはいえ、彼がケニアの海と山で遊んだ事は事実だったようだ。そして、あのヘミングウェイのリゾートに飾られている、大物を釣り上げて胸を張るヘミングウェイの姿、サファリの写真や猟銃を小脇に抱えている姿もまた、その色が赤茶けて変色してはいるが、紛れもなくアフリカで撮った写真なのだと思う事ができた。

「老人と海」という小説は、ヘミングウェイが3番目の妻ゲルホーンと暮らしたキューバのハバナ近郊の漁村と海が舞台だ。そこに主人公サンチャゴ（老人）が住んでいるが、84日間も漁がない。85日目の朝、漁に出て、巨大なカジキに遭遇する。老人は、カジキとの3日間の死闘の果てに、仕留め、船の舷側に括り付ける。サメの群れに襲われ、港に着いたときは、骨だけになっていた。しかし、老人の目には満足があったという筋だ。小説の海は、インド洋ではなかった。作者ヘミングウェイは、フロリダの海で捕ったターポンよりも、インド洋で捕ったカジキの方が、小説として、相応しいと思ったのだろう。「老人と海」は、ヘミングウェイが1954年にノーベル文学賞を受賞する上で、影響があったとされる作品になった。

私は、マリンデイの海辺に、小さなレストランがあり、「老人と海」(The oldman and the sea)の看板が風に揺れているのをみつけ、引き寄せられるように門をくぐった。

資料：① ヘミングウェイ年譜

② 解説 キー・ウエストのヘミングウェイ（高見 浩 訳）